

南条殿御返事

建治二年閏三月二四日 五五歳

かた^帷びら^一、し^塩を^一い^駄ち^油だ、あ^升ぶ^五ら^五そ^う給^身び^隠候^身ひ^了ん^ぬぬ。

ころ^もは^{かん}を^ふせ^ぎ、又^ねつ^をふ^せぐ。み^をか^くし、み^をか^ざる。法華^經の^第七^葉やく^わう^ほん^に云^はく「如^裸者^得衣[」]等^云云。心^はは^だか^なる^{もの}、こ^ろも^をへ^たる^がご^とし。も^んの^心は^うれ^しき^事を^とか^かて^候。付^法蔵^の人^のな^かに^商那^和衆^と申^す人^あり。衣^をき^てむ^まれ^させ^給ふ。こ^れは^先生^に仏^法に^ころ^もを^くや^うせ^し人^なり。され^ば法華^經に^云は^く「柔^和忍^辱衣[」]等^云云。こ^んろ^ん山^には^石な^し。み^のぶ^のた^けに^はし^をな^し。石^なき^とこ^ろに^は、た^まよ^りも^いし^すぐ^れた^り。し^をな^きと^ころ^には、し^をこ^めに^もす^ぐれ^て候。国^王の^たか^らは^左右^の大^臣な^り、左^右の^大臣^をば^塩梅^と申^す。み^そ・し^をな^けれ^ば、よ^わた^りが^たし。左^右の^臣な^けれ^ば国^をさ^まら^ず。あ^ぶら^と申^すは^{涅槃}經^に云^はく「風^のな^かに^あぶ^らな^し。あ^ぶら^のな^かに^かぜ^なし」と。風^をぢ^する^第一^のく^すり^なり。

か^たが^たの^{もの}を^{くり}給^びて^候。御^心ざ^しの^あら^われ^て候^事申^すば^かり^なし。せん^ずると^ころ^は、こ^なん^でう^どの^法華^經の^御し^んよ^うの^ふか^りし^事の^あら^わる^か。王^の心^ざし^をば^臣の^べ、を^やの^心ざ^しを^ば子^の申^しの^ぶると^はこ^れな^り、あ^われ^この^うれ^しと^をば^すら^ん。

つく^しに^をは^しの^太郎^と申^しけ^る大^名あ^りけ^り。大^将ど^のの^御か^んき^をか^ほり^て、か^まく^らゆ^いの^はま、つ^ちの^ろう^にこ^めら^れて^十二^年。め^しは^じし^めら^れし^とき、つ^くし^をう^ちい^でし^に、ご^ぜん^にむ^かひ^て申^せし^は、ゆ^みや^とる^みと^なり^て、き^みの^御か^んき^をか^ほら^んこ^とは^なげ^きな^らず。又^ごぜ^んに^をさ^なく^より^なれ^しが、い^まは^なれ^ん事^いう^ばか^りな^し。こ^れは^さて^をき^ぬ。なん^しに^ても^よし^にて^も、一^人な^き事^なげ^きな^り。た^ゞしく^わい^にん^のよ^しか^たら^せ給^ふ。を^うな^ごに^てや^あら^んず^らん、を^のこ^ごに^てや^候は^んず^らん。ゆ^くへ^をみ^ざら^ん事^くち^をし、又^かれ^が人^とな^りて、ち^とい^うもの^もな^から^んな^げき、い^かゞ^せん^とを^もへ^ども^力及^ばず^とて^いで^にき。

か^くて^月ひ^すぐ^れば、こ^とゆ^へな^く生^まれ^にき。を^のこ^ごに^てあ^りけ^り。七^才の^とし^やま^でら^にの^ぼせ^てあ^りけ^れば、と^もだ^ちな^りけ^るち^ごど^も、を^やな^しと^わら^ひけ^り。い^へに^かへ^りて^はに^ちを^たづ^ねけ^り。は^のぶ^るか^たな^くし^て、な^くよ^り外^のこ^とな^し。此^のち^ご申^す、天^なく^して^は雨^ふら^ず、地^なく^して^はく^さを^いず。た^とい^母あ^りと^も、ち^なく^ばひ^とな^るべ^から^ず。い^かに^父の^あり^どこ^ろを^ばか^くし^給ふ^ぞと^せめ^しか^ば、母^せめ^られ^て云^はく、わ^ちご^をさ^なけ^れば^申さ^ぬな^り。あ^りや^うは^かう^なり。此^のち^ごな^く申^すや^う、さ^てち^のか^たみ^はな^きか^と申^せし^かば、こ^れあ^りと^て、を^はし^のせん^ぞの^日記[、]な^らび^には^らの^内な^る子^にゆ^づれ^る自^筆の^状な^り。い^よい^よを^やこ^ひし^くて、な^くよ^り外^の事^なし。さ^てい^かゞ^せん^とい^ふし^かば、こ^れよ^り郎^従

あまたともせしかども、御かんきをかほりければみなちりうせぬ。そののちは生きてや、
又しにてや、をとづるゝ人なしとかたりければ、ふしころびなきて、いさむるをももち
ゐざりけり。はゝいわく、をのれをやまでらにのぼす事は、をやのけうやうのためな
り。仏に花をもまいらせよ、経をも一卷よみて孝養とすべしと申せしかば、いそぎ寺に
のぼりていええかへる心なし。昼夜に法華経をよみしかば、よみわたりけるのみならず、
そらにをぼへてありけり。

さて十二のとし、出家もせずしてかみをつゝみ、とかくしてつくしをにげいでて、
かまくらと申すところへたづねいりぬ。八幡の御前にまいりてふしをがみ申しけるは、
八幡大菩薩は日本第十六の王、本地は靈山浄土、法華経をとかせ給ひし教主釈尊なり。
衆生のねがいをみて給はんがために神とあらわれさせ給ふ。今わがねがいみてさせ給へ。
をやは生きて候か、しにて候かと申して、いぬの時より法華経をはじめて、とらの時ま
でによみければ、なにとなくをさなきこへほうでんにひゞきわたり、こゝろすごかりけ
れば、まいりてありける人々も、かへらん事をわすれにき。皆人いちのやうにあつまり
てみければ、をさなき人にて法師ともをぼえず、をうなにてもなかりけり。をりしも
きやうのにあどの御さんけいありけり。人めをしのばせ給ひてまいり給ひたりけれども、
御経のたうとき事つねにもすぐれたりければ、はつるまで御聴聞ありけり。さてかへら
せ給ひてをはしけるが、あまりなごりのをしさに人をつけてをきて、大将殿へかゝる事
ありと申させ給ひければ、めして持仏堂にして御経よませまいらせ給ひけり。

さて次の日、又御聴聞ありければ、西のみかど人さわぎけり。いかなる事ぞときゝし
かば、今日はめしうどのくびきらるゝとのゝしりけり。あわれ、わがをやはいままで有
るべしとはをもわねども、さすが人のくびをきらるゝと申せば、我が身のなげきとをも
ひてなみだぐみたりけり。大将殿あやしとごらんじて、わちごはいかなるものぞ、あり
のまゝに申せとありしかば、上くだんの事一々に申しけり。をさぶらひにありける大名
小名、みすの内、みなそでをしぼりけり。大将殿かぢわらをめしてをほせありけるは、
大はしの太郎というめしうどまいらせよとありしかば、只今くびきらんとて、ゆいのはま
へつかわし候ひぬ。いまはきりてや候らんと申せしかば、このちご御まへなりけれども、
ふしころびなきあげり。をゝせのありけるは、かぢわらわれとはしりて、いまだ切らず
ばぐしてまいれとありしかば、いそぎいそぎ、ゆいのはまへはせゆく。いまだいたらぬ
によばわりければ、すでに頸切らんとて、刀をぬきたりけるときなりけり。

さてかぢわらをゝはしの太郎を、なわつけながらぐしまいりて、をゝにはにひきすへ
たりければ、大将殿このちごとらせよとありしかば、ちごはしりをりて、なわをとき
けり。大はしの太郎はわが子とも知らず、いかなる事ゆへにたすかるともしらざりけり。
さて大将殿又めして、このちごにやうやうの御ふせたびて、をゝはしの太郎をたぶのみ
ならず、本領をも安堵ありけり。大将殿をほせありけるは、法華経の御事は、昔よりさ
る事とわきゝつたへたれども、丸は身にあたりて二つのゆへあり。一つには故親父の御

くびを、大上入道に切られてあさましともいうばかりなかりしに、いかなる神仏にか申すべきともいしに、走湯山の妙法尼より法華經をよみつたへ、千部と申せし時、たかをのもんがく房、をやのくびをもて来てみせたりし上、かたきを打つのみならず、日本国の武士の大將を給ひてあり。これひとへに法華經の御利生なり。二つにはこのちごがをやをたすけぬる事不思議なり。大橋の太郎というやつは、頼朝きくわいなりとをもう。たとい勅宣なりともかへし申して、くびをきりてん。あまりのにくさにこそ、十二年まで土のろうには入れてありつるに、かゝる不思議あり。されば法華經と申す事はありがたき事なり。頼朝は武士の大將にて、多くのつみつもりてあれども、法華經を信じまいらせて候へば、さりともとこそをもへとなみだぐみ給ひけり。

今の御心ざしみ候へば、故なんでうどののはたゞ子なれば、いとをしとわをぼしめしけるらめども、かく法華經をもて我がけうやうをすべしとはよもをぼしたらじ。たとひつみありて、いかなるところにをはすとも、この御けうやうの心ざしをば、えんまほうわう・ぼんてん・たひしゃくまでもしろしめしぬらん。釈迦仏・法華經もいかでかすてさせ給ふべき。かのちごのちゝのをなわをとときしと、この御心ざしかれにたがわず。これはなみだをもちてかきて候なり。

又むくりのをこれるよし、これにはいまだうけ給はらず。これを申せば、日蓮房はむくり国のわたるといへばよろこぶと申す。これゆわれなき事なり。かゝる事あるべしと申せしかば、あだかたきと人ごとにせめしが、經文かぎりあれば來たるなり。いかにいとうもかなうまじき事なり。失もなくして国をたすけんと申せし者を用ひてこそあらざらめ。又法華經の第五の卷をもて日蓮がおもてをうちしなり。梵天・帝釈是を御覽ありき。鎌倉の八幡大菩薩も見させ給ひき。いかに今は叶ふまじき世にて候へば、かゝる山中にも入りぬるなり。各々も不便とは思へども、助けがたくやあらんずらん。よるひる法華經に申し候なり。御信用の上にも力もをしまし申させ給へ。あえてこれよりの心ざしのゆわきにはあらず。各々の御信心のあつくうすきにて候べし。たいしは日本国のよき人々は一定いけどりにぞなり候はんずらん。あらあさましや、あらあさましや。恐々謹言。

のちの
後 三月廿四日

日 蓮 花 押

南 条 殿 御 返 事